

“The Bond of Flesh and Spirit” ——Nella Larsen, *Passing* におけるエクスタシーの可能性

与良美紗子

はじめに

文学研究において、ある作品内に「同性愛的欲望」が存在すると言われるとき、それは何を意味するのだろうか。Nella Larsen の *Passing* はハーレム・ルネサンス期の黒人中産階級の二人の女性 Irene Redfield と Clare Kendry の関係を描く。その題名から、物語は一見 Clare の人種的パッシング——黒人が白人として「パス」すること——を中心的な主題としているかに思われる。ところが、Deborah E. McDowell が “Larsen envelops the subplot of Irene’s developing if unnamed and unacknowledged desire for Clare in the safe and familiar plot of racial passing” (xxx) と指摘して以降、多くの批評家が、二人の間にある「同性愛的」あるいは「レズビアン的」欲望を——ときには人種よりも中心的な問題として——読み取ってきた¹。Irene は理性に反して Clare に惹かれ、Clare もまた、Irene を誘惑するかのように振る舞う。Irene から Clare への、もしくは Clare から Irene への「同性愛的」欲望を読み取るのは自然なことのようにも思われる。

けれども、Irene と Clare の関係を「同性愛的」と早急に定義すれば、Irene の抱える苦痛を性の問題だけに矮小化してしまうのではないか。性は本作において確かに重要なテーマである。しかし、本作が人種問題だけを描いた物語でないからといって、それは本作が性だけを主題化するということを意味しない。Irene がたびたび抑圧する身体衝動、アメリカから絶対に動きたくない Irene とブラジルに移住したい夫との攻防、二人の精神的な結びつきの薄さ。こうした問題と Clare は全く関係していないのだろうか。このような問題意識のもとで、本稿は、Irene は Clare をなぜ求めるのか、もしくは、Irene は Clare に何を求めるのか、という問を考察する。それについて考えることは、Irene が Clare を「性的に」求めているという議論を必ずしも否定するものではない。本稿が考察したいのは、他者を性的に求めるとはどういうことかという問題でもあるからだ²。

本稿は、Irene の Clare への欲望の中心にあるのは、Clare との「性的な」触れ合いというよりも、Clare が喚起するエクスタシーの可能性であると議論したい。第1節では、Clare は、生活の安全を最優先する Irene のこれまでの生き方に揺さぶりをかけること、第2節では、その Clare によって Irene は安全のためにエクスタシーを犠牲にし

てきたと気付くが、そのエクスタシーとは、実は Irene が希求するものであることを確認する。それを踏まえ、第3節では、Clare は、エクスタシーを Irene に連想させるだけで、Irene を魅惑する装置として十分に機能し得ると論じたい。

1. 安全の崩壊

Irene は、安全と安心を確保できる今の生活の継続を、何事よりも優先させる。その生活は黒人中産階級のコミュニティから疎外されず、夫との家庭生活を壊さないことによって保たれる。黒人の地位向上運動に精力を傾ける Irene の振る舞いは、ハーレムの共同体の一員として模範的といえる。家庭においても、夫・Brian Redfield を支え、息子たちの教育に気を配るその様子は、中産階級の妻・母として完璧であるように思われる。日々の“the easy monotony” (221) の維持にすべてをささげる Irene にとって、Brian が今なお抱える「医者の仕事も、アメリカという故郷も捨て、ブラジルに移住したい」という願望は、憎悪の対象であり、恐怖の源である — “she was afraid that he would throw everything aside and rush off to that remote place of his heart’s desire” (221)。共同体、家庭、国といった今の自分が所属しているものから逸脱してしまえば、安全が損なわれる恐れがあるからだ³。

対照的に、Clare の生き方は安定とは程遠い⁴。人種的パッシングはそもそも危険を伴うが、Clare は、非常に黒人差別的な夫に対しても黒人であることを黙っている。“Risky! I should say it was. Risky!” (205) と Gertrude Martin が言う通り、Clare の生き方は非常に危険である。その上、Irene と再会した Clare は、夫との生活を維持しながら、同時に、Irene を介してハーレムに戻って来ようとする。Clare は危険に危険を重ねるのだ。こうした Clare の生活の不安定さは、夫に付いてヨーロッパ中を飛び回ったことがあり、今もヨーロッパとアメリカを定期的に往復しているという、文字通りの意味で定住しない生活に象徴される。肉屋の妻としてひとところに留まる Gertrude との対照によって、Clare の生活の不安定さは一層強められる。

リスクを取ることを体現する Clare は、Irene の安全への執着を揺るがすような発言を繰り返す。まず、再会したとき、Clare は Irene に “Tell me, honestly, haven’t you ever thought of passing?” (190) と聞いてくる。Irene はすぐさま否定するが、この問いは Irene への揺さぶりとして機能し得る。もし Irene が白人として「パス」できる外見を持たないのであれば、Clare の問は意味を持たない。けれども、肌が十分白い Irene は「パス」することが可能であり、現に、Clare と対峙しているとき、白人でなければ入れないホテルのラウンジを使うために「パス」している。中産階級としてのアイデンティティを持つ Irene が、中産階級の生活を送るためにしばしば社会的に必要なとされる白人のカードを、心の底から求めていないとは考え難い。Clare は、人種への義務感から Irene が考えないようにしていることを、平気で言葉にしてくるのだ。次第に、Irene は、安全にしがみつくと自分の態度を、Clare に馬鹿されている気がしてくる。た

たとえばそれは “How could you know? How could you? You’re free. You’re happy. And,’ with faint derision, ‘safe” (227) という Clare のセリフに表れている。実際に Clare がどう思っていたかは定かではないが、Irene は、Clare の登場によって、安全を最優先する自分の生き方に疑問を抱くようになる。

Clare はさらに、役割や共同体から逃れたいという欲求を Irene に喚起する。“[B]eing a mother is the cruelest thing in the world” (227) という Clare の言葉は、“so accurately had Clare put into words that which, not so definitely defined, was so often in her own heart of late” (228) だった。Clare は、Irene が無意識のうちに抱えていた、母親の役割から逃れたいという欲求を言語化するのだ。さらに、Irene は、Clare がいなければ感じずにすんだはずの、人種の共同体から自由になりたいという思いにも駆られてしまう。Irene は、Clare のパッシングの秘密を Clare の白人の夫に暴露しようとするが、自分と人種、そして、Clare と人種が不可分であるために、それができない。そのとき Irene は初めて人種を “the burden” として感じる—— “Her race. Race! The thing that bound and suffocated her” (265)。Clare と再会したがために、Irene の家庭と共同体への無条件の従属は揺らぎ始めるのだ。

2. エクスタシー

Clare によって、Irene は、自分が安全と引き換えにエクスタシーを犠牲にしてきたことにも気付かせられる。Brian が Clare と浮気をしていると思い込んだ Irene は、夫と自分の関係がそもそも脆弱だったことに目を向けざるをえなくなり、その結果、夫との家庭生活で保障される “safety and permanence” を守るため、“happiness, love, or some wild ecstasy” を犠牲にしてきたと自覚する—— “Security. Was it just a word? If not, then was it only by the sacrifice of other things, happiness, love, or some wild ecstasy that she had never known, that it could be obtained? And did too much striving, too much faith in safety and permanence, unfit one for these other things?” (267)。この引用が夫との絆の薄さを認識した直後であることを考えれば、幸せや愛がないことは自然に響く。やや唐突に感じられるのは、“some wild ecstasy” だろう。

“some wild ecstasy” が、安全な生活と引き換えになってしまうのは、エクスタシーが身体衝動を露わにする体験だからである。Butler が “To be ec-static means . . . to be transported beyond oneself by a passion, but also to be *beside oneself* with rage or grief” (*Undoing* 20) と述べるように、エクスタシーは、情熱にしても、怒りや悲しみにしても、強い身体衝動によって引き起こされる。“[C]hallenge the very notion of ourselves as autonomous and in control” (19) という意味でのエクスタシーは、身体を統御する日ごろの自分を失う様態を指している。

黒人中産階級の共同体から逸脱しないためには、身体衝動を抑圧する必要がある。当

時の黒人の地位向上運動は、白人中産階級の価値観を賞揚することと密接に結びついていた⁵。その運動に精力をそそぐ Irene は、野蛮なものを生活から追い出さなければならない。それゆえ、Irene は Brian の音を立てる食べ方を嫌悪し、息子のマナーを注意し、息子が外で身に着けてきた性の知識を、“queer ideas” (219) として拒否する。そして、自分は怒りや涙などの身体衝動を、たびたび強引に押さえつけようとする。すなわち、エクスタシーのように“wild”なものは、取り除かれなければならないのだ。

しかし、Irene の身体は、身体の解放としてのエクスタシーを求めている。抑えきれない身体衝動は、体の震えや笑いの発作となってたびたび現れる。物語冒頭のあまりの暑さに倒れそうな状態は、Irene の日ごろの身体の状態を象徴しているだろう。そうした身体衝動はしばしば、“flood”や“explosion”など、あふれ出るイメージと共に語られる。パーティーの最中、Irene が怒りを高ぶらせると同時にコーヒーカップが割れるとき、怒りの衝動は、白い布と白い破片の中にしみ出す黒い液体と呼応する。

Rage boiled up in her.

There was a slight crash. On the floor at her feet lay the shattered cup. Dark stains dotted the bright rug. Spread. The chatter stopped. Went on. Before her, Zulena gathered up the while fragments. (254)

白さの中にしみ出す黒さとしての怒りは、白人中産階級の価値観の中で抑圧され、出口を求める Irene の身体衝動を象徴する⁶。白人中産階級の規範を内面化した Irene の理性に強引に抑圧される Irene の身体は、限界を訴え、いまにも、理性を凌駕しそうになっている。Irene は、身体的に、エクスタシーを求めている。

ただし、エクスタシーは、自己完結的な身体の解放だけを意味するわけではない。同時にそれは、他者との接近によって自他の境界が一時的に消滅するような、精神的体験でもある。Butler は、エクスタシーをもたらす強い感情が、他者の存在を五感で感じるときに引き起こされると記す——“one is undone, in the face of the other, by the touch, by the scent, by the feel, by the prospect of the touch, by the memory of the feel” (*Undoing* 19)。José Esteban Muñoz は、エクスタシーがしばしば他者との関係の中で生まれることを明示的に論じている。彼によれば、エクスタシーは一般的に“a mode of contemplation or consciousness that is not self-enclosed, particularly in regard to being conscious of the other” (186) を指す。ここで「他者」は人である必要はない。Muñozによれば、むしろ歴史的にはエクスタシーは人が神に近づくときの状態を意味してきた。たとえば、Lorenzo Bernini の彫刻作品“Saint Theresa’s Ecstasy”は、“a leaving of self for something larger in the form of divinity” (186) を表していると Muñoz は論じる。Butler と Muñoz に共通するのは、エクスタシーが、単なる身体の統御を欠く状態ではなく、自分以外のものとの近接や合一をも含意しているということである。すなわち、エクスタシーは、普段は厳然と存在

する自他の境界が曖昧になり、人間が根源的に抱える孤独を慰撫する体験でもあるのだ。

この点でも、Irene は、エクスタシーを求めている。Irene は孤独だからだ。自分と夫の間には “the bond of flesh and spirit” (218) が強固に存在すると Irene は信じてきた。しかし、客観的に見れば、Brian との会話から、二人の性的な関係がうまくいっていないことも、また、どこか欺瞞の感じられる Brian の振る舞いから、二人の精神的な結びつきの弱さも明らかだ。最終的には、Irene 自身、“She was, to him, only the mother of his sons. That was all. Alone she was nothing. Worse. An obstacle” (254) と思い、さらには、“Strange that she couldn’t now be sure that she had ever truly known love. Not even for Brian. He was her husband and the father of her sons. But was he anything more?” (268) と思い至り、孤独を自覚する。ラストシーンが前景化するの、Irene と Brian の心の距離の遠さである。Irene には Brian の慰め方がもはやわからず、Brian が Irene を慰める動作も “perfunctory” (274) である。Clare が再三訴える孤独は、Irene の問題でもあったのだ。

3. Clare の “caressing smile”

エクスタシーが Irene にとっていかに必要であるかを踏まえたうえで、Irene は Clare をなぜ求めるのかという初めの問に戻ろう。まず、Irene の Clare への何らかの欲望は、たとえば夫代わりの日常のパートナーとして Clare を求めているという類のものでないことは、確認しておくべきだろう。たとえば、David L. Blackmore は、“Larsen would offer lesbianism as an alternative to the middle-class heterosexual order which she presents as so emotionally empty and sexually stifling” (480) と述べている。性の問題はこれから論じてゆくが、まず考えたいのは、Irene は、“emotionally empty” な状態を Brian の代わりに埋める存在として Clare を求めているのかという問題である。Irene にとって、Clare は基本的に “unfathomable, utterly beyond any experience or comprehension of hers [Irene’s]” (206) である。たとえ Irene が Clare を理解したと感じても、それは、自己投影の結果である可能性が高い。たとえば、Clare の夫が、Irene や Clare の前で黒人を侮辱するとき、Irene は Clare が自分と同じ憤りを感じていると決めつける。しかし、実際のところ、明らかに怒っているのは Irene だけであり、これまで平気でパッシングをしてきた Clare が怒っているかどうかは全くわからない。このように、Irene は自己投影の結果として Clare を理解するが、Clare の内面的固有性を見出しているわけではない。Irene は、Clare の内面的特質を求めていないばかりか、そもそもそれを見出していないのである。

Irene の Clare への執着は徹底的にその身体にある⁷。Irene は、Clare に再会してから一貫して Clare の身体にまつわる要素を、過剰なまでに、詳細に記述する。Irene にとっての Clare の存在意義は、その大部分が Clare の身体そのものにある。それは、Clare がビルから転落したあとに明らかになる。“She felt nauseated, as much at

the idea of the glorious body mutilated as from fear” (273) という一文が示すように、Irene の意識は、ひとりの人間の死という緊急事態に不釣り合いなほど、Clare の身体だけに向いているのだ。さらにその身体は、Irene の記憶の中で、身体にまつわる要素の総和として立ち現れる。

Gone! The soft white face, the bright hair, the disturbing scarlet mouse, the dreaming eyes, the caressing smile, the whole torturing loveliness that had been Clare Kendry. That beauty that had torn at Irene’s placid life. Gone! The mocking daring, the gallantry of her pose, the ringing bells of her laughter. (272)

Clare の身体全体は、まるで分解されるかのように、真っ赤な唇、大きな瞳、鈴の鳴るような声、といった各部分の寄せ集めとして表される。Clare の身体が、各々の要素の総和として立ち現れることによって、Irene にとって、Clare の身体そのものがいかに大きな意味を持っていたかが強く印象づけられる。

Irene が Clare の何に惹かれるかといえば、Clare の身体に付随するこうした各要素そのものにほかならない。たとえば、Clare の電話を受けた Irene が、意に反して Clare と会う約束を結んでしまうとき、Irene に働きかけるのは Clare の声である。

Irene hung up the receiver with an emphatic bang, her thoughts immediately filled with self-reproach. She’d done it again. Allowed Clare Kendry to persuade her into promising to do something for which she had neither time nor any special desire. What was it about Clare’s voice that was so appealing, so very seductive? (194)

電話を切った途端、Irene は後悔する。パッシングしている Clare と付き合あうことの厄介さを考えれば、手放して喜べないのは当然だろうが、Clare の声への愛着は、Clare 本人への愛着とあまりにも結びついていない。Irene は、純粹に、Clare の身体だけに惹かれているのだ。

理性に反して相手の身体に惹かれてしまうとき、その欲望を「性的」欲望と解釈するのは自然なことのように思われる。McDowell や Butler は、Irene の Clare への欲望を性的なものと解釈しており、McDowell は示唆的に、Butler は明示的に、Irene の Clare への欲望を、Clare と今以上に触れ合いたいという欲望として解釈している。McDowell は、Irene が Clare と Brian との浮気を証拠もなく信じ込むのを、Irene 自身の Clare への性的な情熱の投影だと述べる。

The awakening of Irene’s erotic feelings for Clare coincides with Irene’s

imagination of an affair between Clare and Brian. Given her tendency to project her disowned traits, motives, and desires onto others, it is reasonable to argue that Irene is projecting her own developing passion for Clare onto Brian . . . (xxviii)

と指摘する。この主張を Butler も支持する。

Irene passes her desire for Clare through Brian; he becomes the phantasmatic occasion for Irene to consummate *her* desire for Clare, but also to deflect from the recognition that it is her desire which is being articulated through Brian. Brian carries that repudiated homosexuality, and Irene’s jealousy, then, can be understood not only as rivalry with him for Clare, but the painful consequence of a sacrifice of passion that she repeatedly makes, a sacrifice that entails the displacement or rerouting of her desire through Brian. (*Bodies* 179)

McDowell も Butler も、Irene が Clare と Brian の浮気を妄信的に信じ込むのは、“Irene’s awakening sexual desire for Clare” (McDowell xxvi) の投影であると論じている。さらに、Butler はより一歩踏み込み、Brian を Irene の “repudiated homosexuality” が完遂される “phantasmatic occasion” とみなしている。Butler の主張は、Irene は異性同士の性器接合に準ずるような Clare との触れ合いを求めているが、それができないので、その抑圧された欲望が Brian と Clare の浮気の妄想に回帰しているということになるだろう。Butler の議論では、Irene の Clare への「欲望」は、Clare と今以上に物理的に触れ合いたいという欲望と同義である。

とはいえ、McDowell も Butler も注目する、Irene の（おそらくは）思い込みは、Irene の Clare への抑圧された性的欲望の投影としてではなく、Clare が誰に対しても官能的に振る舞うことから説明され得る。Clare ははじめ、夫ではない謎の男性と共に Irene の前に現れる。Irene は Clare の官能的な唇が開かれる様子、それに伴う “the peculiar caressing smile” (177) を描写する。男は去る。つぎの瞬間、Clare はウェイターと同じほほ笑みを浮かべている。Clare は Irene にもそのほほ笑みを向けるが、再びやってきたウェイターにまたしても同じ “that odd upward smile” (180) を向ける。それは “too provocative for a waiter” (180) である。つまり、はじめから、Clare の官能的な誘惑は Irene だけでなく、ほとんど誰に対しても発動するのだ。もし、Clare が Irene だけを「誘惑」するにもかかわらず、Irene が Clare と Brian との情事を想像するのであれば、Clare と触れ合いたいという Irene 自身の欲求が投影されていると考えるのは妥当だろう。しかし、Clare は男であろうと、女であろうと、知り合いであろうとなかろうと、誰とでも性的な関係を構築する人物である、と少なくとも

Irene の目には映っている。Irene の意識の中で、Clare の官能性が向けられる対象に Brian が入るのは、自然の成り行きといえよう。そしてその魅力を Irene は重々わかっているのだから、Brian が Clare に惹かれると妄想するのも、不自然とはいえない。

Irene が感じる Clare の身体の魅力の中心には、Irene が普段得ることのできない“caressing”の感覚がある。Clare と再会したとき、Clare に見つめられた Irene は、実際には触れられていないにも関わらず、愛撫される感覚を抱く——“Into those eyes there came a smile and over Irene the sense of being petted and caressed”(191)。その後、Clare は“caressing smile”を繰り返す。転落する直前も “It was that smile that maddened Irene” (271) と Irene に思わせるのだから、Irene を惹きつける魅力の核は、この“caressing smile”にある。触れられる感覚は普段、Irene が得られないものである。セックスを“a grand joke”で“disappointments”という Brian のセリフから、Irene が普段の生活において身体的な触れ合いを欠いていることがわかる(220)。そして、愛撫の欠如は、Irene が化粧をし、ドレスアップする場面が繰り返し描かれることによっても象徴される。素肌に触れてくる他者が Irene にはいないのだ。

この愛撫の感覚が、Irene にエクスタシーの可能性を喚起する。Eve Kosofsky Sedgwick は *Touching Feeling* において、大事な他者との物理的な触れ合いが、精神的な触れ合いに転じることを示している。Sedgwick はアーティストの Judith Scott が等身大の繭型の作品に全身で抱き着いている作品の写真を載せ、“Parents and babies, twins (Scott is a twin), or lovers might commune through such haptic absorption” (22) と述べる。体全体で触れ合うとき、肌は共有され、自他の境界が文字通り曖昧になり、その中で“commune”（精神的合一）も生まれる。その触れ合いが性的な高揚も伴うものであれば、身体の衝動に身を任せながら、同時に、孤独も慰撫されうる。それがエクスタシーである。Clare は Irene にエクスタシーを実際に与えるわけではない。しかし、Clare の身体は、エクスタシーを導きうるような性的な触れ合いの感覚を Irene に喚起する。それによって Irene はエクスタシーの状態を連想できる。そのこと自体が、エクスタシーを強く求めている Irene を高揚させる。

加えて、Irene にとって、Clare は、エクスタシーという非日常の象徴でもある。Muñoz によれば、エクスタシーによって我々は“a queer temporality, a thing that is not the linearity that many of us have been calling straight time” (186) に出会う可能性を秘めている。すなわち、エクスタシーは非日常である。Clare はその非日常性によってエクスタシーを Irene に想起させる。Irene が Clare と再会するホテルのラウンジは、その別世界性が強調される。“It was, she thought, like being wafted upward on a magic carpet to another world, pleasant, quiet, and strangely remote from the sizzling one that she had left below” (Larsen 176)。ラストシーンでも、Irene はビルの階段をかけ降りる——“Down, down, down, she went” (273)。そこは Clare 不在の世界である。このように Clare は Irene の日常とのコントラストをなすのだ。Clare は常に Irene の日常から乖離する。“ordinary”な封筒に交じった、イ

タリア製の“extraordinary size”な Clare の手紙 (171)。年相応に老けた Gertrude Martin と並ぶ、Clare の変わらない美しさ。Clare の存在そのものが、Irene に、逸脱の時間としてのエクスタシーを連想させる。

したがって、Clare は、その身体が呼び覚ます愛撫の感覚や、あるいは、その存在の非日常性によって、Irene にエクスタシーを連想させる。それだけで、Clare が Irene を高揚させるには十分なのであり、Irene が Clare の身体に今以上に触れたいと思っていると解釈する証拠はどこにもない。むしろ、Butler のように、Irene の Clare への何らかの欲望が、Clare とのいわゆる肉体関係を志向すると解釈してしまえば、Irene が抱えているさまざまな問題や不満を、性の問題だけに矮小化してしまう。言い換えれば、Butler は、Irene の Clare への欲望を、Clare といわゆる肉体関係を結ぶことによって完遂されるものとして解釈している。そうであれば Clare は、Irene が夫との間で満足できない性的な欲望を満たし得る存在にすぎない。しかし、前節で述べたように、Irene は、性の問題だけではなく、身体衝動の抑圧や深い孤独を抱え、それらすべてが Irene を苛んでいたのだった。そして、さまざまな満たされなさから解放するものとして、“some wild ecstasy” が求められていたのだった。このエクスタシーを連想させるがゆえに、Clare の身体は、Irene を魅了する。この主張には、Clare とのいわゆる肉体関係への欲望は、書かれていないだけだという反論もあるかもしれない。しかし、それは、Irene が Clare を殺したのかどうか分からないのと同じくらい、わかりようがないことである。

以上の議論から、本稿は、Clare は、その身体の喚起する愛撫の感覚によって、また、その存在そのものによって、Irene にエクスタシーを連想させるというだけで、Irene の理性を奪い、どうしてもなく惹きつける装置として十分に機能すると結論づける。エクスタシーの可能性を呼び覚ます Clare の官能的な身体に惹きつけられる Irene は、Clare を「性的に」求めているとしか言いようがないだろう。しかし、Irene が、Clare とそれ以上の触れ合いを持ちたいと決めつける根拠はどこにもない。むしろ、Irene の Clare への欲望を性の問題だけに限定してしまえば、Irene の抱えた苦痛の根深さを軽視し、ひいては、人種や性の問題だけを描いたわけではない本作の豊かさを見逃すことになる。エクスタシーは、むしろ性的な不満の解消を含みながらも、それを越えて、あらゆる身体衝動を解放し、さらには、孤独さえも慰撫するような体験である。そして、そのエクスタシーの可能性を Clare の身体が喚起し、そして、Clare という存在そのものがエクスタシーという夢の時間を連想させるからこそ、あれほど安全を求め続ける Irene が、同時に、Clare をも求めざるを得ないのではないか。

注

¹ ほかに、David L. Blackmore、Judith Butler、H. Jordan Landry の議論を参照した。

² Irene から Clare という一方向に問を絞るのは、本稿が “Initially, *Passing* seems to be about Clare Kendry, inasmuch as most of the incidents plot out Clare's encounters with Irene and Black society” (Tate 146) という立場を取るからである。語り手の認識は Irene の認識とほとんど同一化している。Clare が本当のところ何を考えていたのかは、不明である。

³ Irene の固定的なアイデンティティへの執着に関して、Josh Toth は、Jean-Luc Nancy の議論を援用し、以下のように論じる。

Given her inability to shake her doubts, though, Irene's “feeling of permanence” can be understood as a fantasy, a tenuous but outright denial of the impossibility of the Real, the impossibility of an essential social bond and, thus, the impossibility of a stable (or finally and accurately symbolized) self. Moreover, this “fantasy” of permanence and fixed identity is clearly linked to her sustained belief in, or nostalgia for, communities of immanence. . . . (64)

⁴ Tate は Irene と Clare の鏡像関係を指摘している “Hence, the two portraits are polarized and mutually complementary—one is purely external, while the other is intensely internal” (145)。

⁵ Kevin Kelly Gaines, 4-5 を参照した。

⁶ エピグラフに使われる Countee Cullen の “Heritage” は、「身体衝動／文明化」を「アフリカ／西洋」に対応させている。西洋世界で暮らす語り手は、“What is Africa to me” をリフレインする。語り手は、アフリカを、性衝動を含めた身体衝動が露わにできる土地として想像する。最終連の “Not yet has my heart or head / In the least realized / They and I are civilized” (28) という一節は、語り手が “civilized” な土地にしながら、アフリカの象徴する身体衝動を抱えていることを示している。この詩の構図と、「白さ」の中ににじみ出る「黒い」Irene の身体衝動とは、対応関係が見られる。

⁷ Landry は、Irene と Clare が髪や目などお互いの身体のパーツを “fetishize” することに注目する。“*Passing* challenges earlier representations of the mulatto female character and offer an alternative reading in which Irene's and Clare's lesbian desire emerges from their idealization of the black female body” (28) と Landry は論じるが、Irene が Clare の身体に感じる魅力のすべてが、民族的な美しさに回収できるものではない。

Works Cited

Blackmore, David L. “‘That Unreasonable Restless Feeling’: The Homosexual Subtexts of Nella Larsen's *Passing*.” *African American Review* 26.3 (1992): 475-84.

Butler, Judith. *Bodies That Matter*. New York: Routledge, 1993.

---. *Undoing Gender*. New York: Routledge, 2004.

Cullen, Countee. *On These I Stand: An Anthology of the Best Poems of Countee Cullen*. New York: Harper, 1947.

Gaines, Kevin Kelly. *Uplifting the Race: Black Leadership, Politics, and Culture in the*

- Twentieth Century*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1996.
- Landry, H. Jordan. “Seeing Black Women Anew through Lesbian Desire in Nella Larsen’s *Passing*.” *Rocky Mountain Review of Language and Literature* 60.1 (2006): 25-52.
- Larsen, Nella. *The Complete Fiction of Nella Larsen*. New York: Random House, 1992.
- McDowell, Deborah E. Introduction. *Quicksand and Passing*. By Larsen. New Brunswick: Rutgers UP, 1986. ix-xxxv.
- Muñoz, José Esteban. *Cruising Utopia: The Then and There of Queer Futility*. New York: New York UP, 2009.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Touching Feeling: Affect, Pedagogy, Performativity*. Durham: Duke UP, 2003.
- Tate, Claudia. “Nella Larsen’s *Passing*: Problem of Interpretation.” *Black American Literature Forum* 14.4 (1980): 142-46.
- Toth, Josh. “Deauthenticating Community: The Passing Intrusion of Clare Kendry in Nella Larsen’s *Passing*.” *MELUS* 33.1 (2008): 55-73.